〔平成 23 年度　博士学位論文要旨〕

現代韓国語の形式名詞‘것 *geos*’に由来する諸形式の研究

言語教育研究科　日本語教育学専攻　博士後期課程　丁　仁京

内容の要旨

本論文は，現代韓国語の形式名詞‘것 *geos*’に由来する諸形式に関する研究である。論文の構成は以下のとおりである。

第 1 章　序論
第 2 章　本研究の考察対象に関する共通知識
第 3 章　従属節における‘것 *geos*’の機能
第 4 章　スコープ機能の‘것이다 *geos-ida*’
第 5 章　モダリティ機能の‘것이다 *geos-ida*’
第 6 章　終結語尾の‘-ㄴ걸 *n-geol*’‘-ㄹ걸 *l-geol*’‘-ㄹ게 *l-ge*’
第 7 章　形式名詞‘것 *geos*’の言語学的位置づけ
第 8 章　結論

従来の研究では，形式名詞‘것 *geos*’及び‘것 *geos*’に由来する諸形式が担う意味・機能を一律に説明できる包括的な研究が未だ行われておらず，研究者の内省や作例によるものが多く，実例に基づいた実証的研究はまだ十分ではない。さらに，形式名詞‘것 *geos*’に先行する連体形語尾（adnominalizer）との関連性についての言及がない点が大きな課題である。従って，本論文は統語構造における形式名詞‘것 *geos*’及び‘것 *geos*’に由来する諸形式の意味・機能を明らかにし，その意味・機能がどのように変化しているのか，さらには，言語学における韓国語の形式名詞‘것 *geos*’の位置づけを多角的な観点からの考察に基づき包括的な研究を目指したものである。

以上の目的を達成するため，本論文では三つの研究方法論を採用している。まず，(Ⅰ) 形式名詞‘것 *geos*’及び‘것 *geos*’に由来する諸形式の意味・機能を一律に説明するため，

‘것 *geos*’に先行する連体形語尾との関連から考察を行った。その理由は，形式名詞‘것 *geos*’が文法化する際に，その諸形式は必ず先行要素である連体形語尾を含んだ形で文法化し，連体形語尾によって表す意味が異なるという 2 点による。次に，(Ⅱ) 機能主義言語学（functional linguistics）で顕著な実績を挙げている文法化（grammaticalization）の観点から，形式名詞‘것 *geos*’に由来する諸形式の意味・機能の拡張を明らかにし，さらに，言語類型論的・対照言語学的研究という視点から類型論的に同タイプである日本語との比較を通じて，韓国語の形式名詞‘것 *geos*’の特徴及び言語学的位置づけを試みた。最後に，(Ⅲ) 形式名詞‘것 *geos*’及び‘것 *geos*’に由来する諸形式が実際の談話においてどのように使用されているのかを調べるために，コーパス資料を用いて実証的な検証・考察を試みた。

以上のような手法を用いて本論文では，まず，形式名詞‘것 *geos*’に先行する連体形語尾−ㄴ *n*，−ㄹ *l* がそれぞれ「現実」「非現実」の事態を表すモダリティ的意味を表す形式であると捉えることで，従来から提唱されているテンスやアスペクト的意味を表す形式と捉えるより一貫した説明ができ，より正確に連体形語尾の意味機能を説明できると主張した。また，この連体形語尾との関連から形式名詞‘것 *geos*’及び‘것 *geos*’に由来する諸形式を考察することで，諸形式が担う意味・機能を一律に説明できることを論証した。

各章での論の展開は以下のとおりである。

第 1 章の前半では，本論文の研究範囲と研究の背景となる先行研究の概観・問題点を挙げている。後半では，本論文で採用している三つの研究方法論とコーパス資料について詳述した。

第 2 章では，本論文の考察に入る前に共通知識として，研究対象である形式名詞‘것 *geos*’の機能，及び‘것 *geos*’の先行要素である連体形語尾に関しての先行研究での知見を概観した上で，本論文の立場を論じた。形式名詞‘것 *geos*’は，語彙的な意味がなく統語的に自立性がないが，具体的なものから抽象的な事柄まで指し示す指示機能と，文を名詞化する名詞化機能を担っている。本論文では，‘것 *geos*’が用言の修飾を受ける際，必須の要素となる連体形語尾の体系については，一次的な形式として−ㄴ *n*，−ㄹ *l* を認め，それぞれ「現実」「非現実」の事態を表すモダリティ的意味を表す形式であるという仮説を提示した。

第 3 章では，従属節のうち連体修飾節を受ける‘것 *geos*’を，関係節，「補文Ⅰ型」，「補文Ⅱ型」に分類し，節が表す事態が「現実」「非現実」であるかを表すとする本論文の仮説によって，‘−ㄴ 것 *n geos*’‘−ㄹ 것 *l geos*’の意味・機能が説明できることを論証した。さらに，連体形語尾について，従来から提唱されているテンスやアスペクト的意味を表す形式と捉えるより，「現実」「非現実」という本論文の捉え方のほうが，「総称」や「漢字の意

味解釈」などにおいても一貫した説明ができ，より正確に連体形語尾の意味機能を説明できることを論証した。

第 4 章から 5 章にわたっては，形式名詞‘것 *geos*’と前後要素とが固定化し，文末に用いられる‘것이다 *geos-ida*’形式についての考察を行った。まず，第 4 章では，従来あまり検討がされていなかった‘것이다 *geos-ida*’のスコープ機能について考察を行った。‘것이다 *geos-ida*’が用いられていない文では，基本的に述語によって示された事態の成立が焦点になるが，述語によって示された事態の成立以外の要素を焦点にするためには，スコープの‘것이다 *geos-ida*’を用いなければならないことを主張した。このようなスコープ機能を担う‘것이다 *geos-ida*’は，形式名詞‘것 *geos*’と前後要素が固定化はしているものの，構成要素それぞれの機能が残っていることから，完全に一語化して機能するダリティの‘것이다 *geos-ida*’より，元来の構造である＜名詞化機能を持つ‘것 *geos*’＋‘이다 *ida*’＞という分析的な構造に近いものであると論じた。

第 5 章では，完全に一語化してモダリティ機能を担う‘것이다 *geos-ida*’について，従来の研究には見られない「複数の事態との関係づけ」という観点から考察を行った。このモダリティの‘것이다 *geos-ida*’は先行する連体形語尾の形式によって‘-ㄴ 것이다 *n geos-ida*’と‘-ㄹ 것이다 *l geos-ida*’に分けられる。この二つの形式が用いられる文では，文を構成する複数の事態が‘明示された事態との関係づけ’されるものと，‘明示されない事態との関係づけ’されるものとに分けられ，その関係づけは話し手の主観的な判断によるものである。この二つの事態の関係づけが明示されるか否かに関わらず，この文を構成する事態が「現実」のみで構成されているか「非現実」の事態を含んでいるかでさらに分けられる。この事態の関係づけでは，「現実」のみの事態で構成されるものには，‘-ㄴ 것이다 *n geos-ida*’が用いられ，「非現実」を含む場合には‘-ㄹ 것이다 *l geos-ida*’が用いられる。連体修飾節で「現実」「非現実」の事態を表すとした-ㄴ *n*，-ㄹ *l* の意味機能が，このように一語化してモダリティ機能を果たす場合には，個々の事態が「現実」または「非現実」であるかではなく，文を構成する事態が「現実」のみか，「非現実」を含むかを表すものへと連体形語尾の機能が変化していることを主張した。このことから，主観的な関係づけがなされた文全体の内容を‘-ㄴ 것이다 *n geos-ida*’文では，「確実な情報」として示し，‘-ㄹ 것이다 *l geos-ida*’文では，「不確実な情報」として示すと論じた。

第 6 章では，従来あまり考察がなされていない形式名詞‘것 *geos*’に由来する終結語尾‘-ㄴ걸 *n-geol*’‘-ㄹ걸 *l-geol*’‘-ㄹ게 *l-ge*’について話し手が言及する情報と統語形式との関連から考察を行った。とりわけ連体形語尾を含めた形での考察という手法は本論文独自のものである。まず，‘-ㄴ걸 *n-geol*’が示す事態は，発話時において直接経験した「確

認済みの既定事態」と「今・ここで初めて知覚した事態」とに分けられ，これら‘-ㄴ걸 *n-geol*’で示される事態は，本論文でいうところの「現実」の事態であり，「現実」の事態を表す-ㄴ *n*が用いられ，‘-ㄴ걸 *n-geol*’文全体で表される内容は「確実な情報」を表すと論じた。次に，‘-ㄹ걸 *l-geol*’が示す事態は，発話時において「確認していない・できない事態」と「反事実が確認済みの事態」とに分けられる。これらの‘-ㄹ걸 *l-geol*’で示される事態は，本論文でいうところの「非現実」の事態であり，「非現実」の事態を表す-ㄹ *l*が用いられ，‘-ㄹ걸 *l-geol*’文全体で表わされる内容は「確信している情報」を表すと論じた。次に，統語的・意味的に最も制限され，特化された‘-ㄹ게 *l-ge*’は，話し手の‘意志’あるいは‘告知’，‘約束’の意味を表すとされてきたが，これらはすべて広義の‘話し手の意志’と言えるものである。さらに，‘-ㄹ게 *l-ge*’が表す話し手の意志は，話し手にとっては決定されたものであり，その意味では確実なものではあるが，その意志による行為は，まだ行われていない行為であり，「非現実」の事態を表す-ㄹ *l*が用いられ，‘-ㄹ게 *l-ge*’文全体の発話内容は「確信している情報」を表すと論じた。形式名詞‘것 *geos*’に由来する諸形式のうち，このように終結語尾として機能する場合は，話し手の主観性が最も強く表れ，話し手の主観的な評価まで表すようになり，発話環境や語用論的な解釈により，様々な意味・用法を表すが，連体形語尾は「現実」の事態であるか「非現実」の事態であるかを表すと主張した。さらに，話し手の主観性により音声的にも上昇・下降のイントネーションが伴い，話し手の態度が表されると論じた。

第7章では，韓国語の形式名詞‘것 *geos*’の言語学的位置づけを試みるため，文法化に関する考察及び類型論的に同タイプである日本語との対照研究を行った。韓国語の形式名詞‘것 *geos*’は，指示機能，名詞化機能，スコープ機能，モダリティ機能，終結語尾としての話し手の主観的な態度を表す機能という多くの機能を担っている。この形式名詞‘것 *geos*’に由来する諸形式は，形態的・音韻的，統語的な変化とそれに伴う意味的な変化がそれぞれの形式で現れているのであるが，文末に現れる‘것이다 *geos-ida*’形式にしろ，終結語尾として機能する‘-ㄴ걸 *n-geol*’‘-ㄹ걸 *l-geol*’‘-ㄹ게 *l-ge*’形式にしろ，同形式の中にもその文法化の段階が異なるものが含まれている。文法化がしにくいとされる韓国語の中にあって，このことは文法化のそれぞれの段階が見て取れる貴重な事例であると言え，その文法化は進行中であると言える。次に，日本語の形式名詞との対照を通して，韓国語の形式名詞‘것 *geos*’が指し示す範囲の広さに対して，日本語では具体的であるか，抽象的であるかなどによって細かく分かれている点で異なる。また，韓国語においての連体形語尾の存在が日本語との最も大きな違いであり，その連体形語尾によって示される事態の違いによって，日本語では対応する形式が多岐に渡ると言える。このように類似点が多いとされる日本語であっても，本論文で扱

った形式名詞‘것 *geos*’のような場合に，連体形語尾がある韓国語と連体形語尾がない日本語とでは，大きな違いを見せることを示した。このように，韓国語と日本語では，構文構造や個々の形式名詞が担っている意味・用法が異なることで，両言語に違いが生じていることと，韓国語と日本語の統語的な違いが連体形語尾の有無によるものであることを主張した。

本論文で以上のような成果が得られたのは，形式名詞‘것 *geos*’単独ではなく，前後要素を含めた形で考察したことによるものである。さらに，連体形語尾との関連からの考察によって，事態が「現実」であるか「非現実」であるかを連体形語尾で明示的に表すという韓国語の持つ統語的特徴を論証した。本論文で得られた成果は，今後の韓国語学における研究に資するものであると信じる。さらに，本論文の成果は韓国語学にとどまらず，言語類型論・一般言語学へ寄与するものと考える。